

FD 学外セミナー参加報告書

氏名： 鳩貝 耕一

所属/職名： 教育学習支援センター 教授

参加セミナー名： 成城大学 公開FDワークショップ '15「表現教育の可能性 ～日本語教育の現場から～」

セミナー参加日時/場所： 2016年1月23日(土) 15:00～17:30 成城大学3号館3階大会議室

■セミナー内容・所感・授業や本学への活用について

「表現教育の可能性 ～日本語教育の現場から～」阿部達雄（一橋大学非常勤講師）

ご専門は言語学（語用論、表現論、文体論、笑い）で、笑いを言語学の見地から研究している。一方、プロの漫才師としても、ビートたけしの門下で「サンキュータツオ」として活躍している。

主に留学生に日本語を教えているが、留学生の日本語のレベルは日本の大学生と比べてもさほど差はないとのことであった。ただし、文法の扱いに少し問題があり、あるいはネイティブの日本人が持つ文化的背景とは違う文化で育っているため、上達すればするほど文章能力に改善がみられなくなるため、留学生への日本語教育に限界を感じている。

日本語文章の教育では、文章を書く上での以下の三つの法則を重要視している。

1. テーマが何であるのかを知る（情報源の読み込み）
2. どんな人が読むのかを（想像）
3. 文章にどのような工夫を付すのか（工夫）

書く前に以下の表のようなメディアの違いを意識しながら日本人の書いた文章を読む訓練、あるいは文章や日本語のミスを集めたテーマごとに小テストを行ったりしている。

書く人の人数	読む人の人数	文書例
多	多	新聞、SNS、・・・
多	1	授業のレポートなど
1	多	小説、本、飲み会のお知らせなど
1	1	電子メール、手紙

日本語教育を行っている教師の方々は、文章を書くことを良く「マラソン」に例えるが、授業で課題を与えると、単位をとるためだけの文章を書いてしまうという悪循環に陥る。このことを「学校人格」と名付けていた。すなわち、作文の最後を世間一般で「良い」とされている事柄で締めくくってしまうわけである。別の言葉で表現すると、「良い子」、「正義の使者」、「模範学生」などの立場で文章をまとめてしまうということであろうと解釈した。

こういった悪循環を避けるため、授業においては、まずは文章を出力しやすい雰囲気を作ること、そして身近な問題として自身の意見を出しやすい課題を教員が考えることが重要であるとのことであった。授業中に実際に与える課題をいくつか示していたが、一つの課題を作成する際に考慮すべき事項について整理し解説された。それらをまとめると、

- タスクをあまり多く設定しない。たとえば、引用についての課題を出すならば、引用のコツやポイントのみが理解できるような課題を設定する。
- ネットに答えや意見が載っていないテーマを選ぶ。
- 課題をこなしていくプロセスが楽しめれば、なお良い。
- 習得した文型を応用して書く課題。
- 学生個々の個性が出しやすいような課題を考える。
- 善悪の二元論では解決しない課題、たとえば「タバコ容認論」など。

今回のワークショップでの解説は、「IT 基礎」等での文章題を考える上で大変参考になるものであった。

必要事項を記入後、データで教育学習支援センターにご提出ください。

教育学習支援センター：lucks@adm.konan-u.ac.jp(内線：2180)